

## 自分の正体を知るために

徹底的に自画像を描き切った先にみえるもの

自画像は画家の主題の定番です。折に触れて画家は自画像を描きますが、その頻度において飛びぬけている画家が日本にいました。その名は吉村芳生です。二〇一八年東京ステーションギャラリーにおいて「吉村芳生 超絶技巧を超えて」と題した吉村の回顧展が開催されましたが、私はその会場で新聞紙に描かれた（新聞紙自体もまた精密に描かれた絵なのです）自画像群を観て、腰が抜けるほど驚き、そして強烈な感動を得ました（図1-1）。まずは会場の壁面を埋め尽くす新聞紙に描かれた自画像群の圧倒的な数です。最初は既成の新聞紙面上に鉛筆で描いた自画像だとはや合点して観てしまいましたが、近づいてみると、その新聞紙面自体もまた、精密に鉛筆で模写されているのです。つまり、全てが吉村が描き出した一枚の絵なのです。それが三六四枚壁面を埋め尽くしているのです。二〇〇九年の元旦から一年間、コンビニで毎日新聞を買い、一面を鉛筆で模写し、その上にカメラで撮影したその日の自画像を重ね合わせて描き上げるといふ途方もない作業です。一日たりとも同じ顔はありません。その日の吉村自身の外面そして内面も含めて全ての情報が、一枚一枚にもすごい熱量で描き出されています。この自画像シリーズの原点は、一九八一年七月二四日から一九八二年七月



図1-1 吉村芳生「新聞と自画像」群

二三日まで、毎日カメラで撮影した自画像を、約一〇年かけて鉛筆で書き出した作品群が最初です。また彼は二〇一一年から一年間パリに留学していますが、その間も毎日パリの新聞紙上に自画像を描き続けていました(図1-2)。その数は一〇〇〇枚に及んでいます。おそらく吉村ほど自画像を数多く描いた画家は古今東西他にいないでしょう。

一体何が彼にそれほどまでに自画像を描かせたのでしょうか。彼はパリの一年を次のように語っています、「自画像なんてどこで描いても同じと思うかもしれないが、パリにはパリでしか描けない自画像があるのです」と。言うまでもないことですが、自分自身は日々刻々と変化しています。この瞬間瞬間に体は微細に老化していくはずですし、自分を取り巻く環境との関係で、その日の心身のコンディションは確実に変化します。いわんや異国パリでの生活は、さらにその変化を強烈に感じざるを得なかったのであり、それゆえの一〇〇〇枚にも及ぶ自画像なのだと考えます。吉村はおそらく、この微細な、また深刻な自分自身の変化を、決して見逃したくないと考えていたのだと思います。自分自身の存在に対するとてもなく切迫した興味関心を、これらの膨大な自画像は物語っています(図1-3)。

自画像を描くモチベーションは、何よりもまず自分という存在に対する興味関心が初発の動機でしょう。自分がひとたびネガティブな状況に見舞われると、「どうして自分が?」とか「なぜこうなるんだろう?」等、自分自身の内的な側面、自分自身の存在の在り様に対して、疑念やもどかしさを感じるはずです。そうしたネガティブな思いが自分を見つめさせる契機となり、自分という存在の意味について深く自省することになるのではないのでしょうか。その自省の最も有効な手立てが、「自画像を描くこと」なのだと思います。鏡に映る自分の顔を執拗に観察して書き写すこと、それは決して外的な情報の再現に留まらず、外面に浮き上がった内的な諸々をも自覚することを意味します。あるいは自分を撮影した写真を書き写すこともまた同様でしょう。外面の描出以上に、そこに浮かび上がっているはずの自身の内的事実もまた把握するために、おそらく自画像は描かれるでしょうし、自身の内的理解こそ自画像を描く本来の意味なのだと考えます。



図1-2 吉村芳生《新聞と自画像》  
2008.6.15 中国新聞 二〇〇八年



図1-3 吉村芳生《Self-portraits 1000 in Paris》  
(パリの新聞と自画像) 二〇一一—二〇一二  
年

そのことは、既に四〇〇年前にオランダの画家レンブラントが数多くの自画像を通して表明しています。レンブラントの自画像を経年の的に見ることで、彼の生涯の外的・内的な変化をつぶさに感得できます。特にこちらを見つめる彼の「まなざし」の在り様が、端的にそのときの彼の内面を物語っています。将来への希望溢れる若い頃の意気揚々としたまなざし(図1・4)、中年の頃の静かな自信に満ちたまなざし(図1・5)、そして破産をして十分に筆すらも買えなくなってしまう晩年の悲壮感漂うまなざし(図1・6)、レンブラントの自画像のまなざしの在り様の変化は、誰の目にも明らかです。まさに自画像とは、描き手の外的・内的変化のまぎれもない痕跡なのです。

吉村やレンブラントのようにはいかないとは思いますが、もしあなたが今の自分の在り様や状況に対して肯定的な思いを抱けないのであれば、一度紙と鉛筆で自画像を描いてみませんか。もちろん上手に描く必要などありません。ただ、静かに自分自身に対峙する時間を持つこと、それが大切です。描いていくうちに、今の自分の内的な問題が少しづつ浮上してきて、それに対して自分ほどの



図1・4 レンブラント《ゴルゲットを付けた自画像》一六二九年



図1・5 レンブラント《自画像》一六四二年



図1・6 レンブラント《ベレー帽と立ち襟を付けた自画像》一六五九年

ような考えを抱いたり対処をすればいいのか、ほんの少しでも見えてきたならば、自画像制作の役割は十全に果たされているのです。

(小澤基弘)